

なな

5 月号
vol. 147



特集

だじだじ

④ あの音を止めるのはあなた

2018年1月からゆ〜とあいは居住支援法人のなかま入り。まちの人の相談の中で「このまちの公営住宅や古い木造住宅をもっと活かさなきゃ。」そんな気持ちがふつつあふれてくる。ヒントを探しにいろんなところへ、いろんなひとに。

すむすむ

④ あの音を止めるのはあなた

🏠 もう一つの民営化？

東大阪市営荒本・北蛇草住宅では

2017年4月から指定管理者制度が導入された。これまでは市の直営なので、問題が起これば行政に管理責任を求めてきたが、これからは民間の指定管理者にお願いすればいいだけだ、と捉えることもできた。しかし、荒本・北蛇草の住民たちは住民自治や互助再興のチャンスと捉えた。東大阪まちづくり機構(以下「機構」)を立ち上げ、近鉄住宅管理㈱とタッグを組み、指定管理者となった。

指定管理者制度は、多様化する住民ニーズへの対応や効率的な運営のために民間事業者のノウハウを導入し、市民サービスの向上と管理経費の削減を図る仕組みである。効率化は民間企業の得意とするところだが、公営住宅住民の多様なニーズに応えるのは地域団体やNPOの出番だ。これらの取り組みは、きつと地域やNPOなど市民が公営住宅に参画す

る「公営住宅の市民営化」の可能性につながっているはず。そんな想定をしつつ荒本でお話をうかがった。

🏠 建物も住民も高齢化する

荒本は30棟・1080戸、北蛇草は40棟・1206戸のマンモス団地で、公設公営の子育て・医療・人権・スポーツ施設が集中し、1つのまちに匹敵する規模だ。1960年代から70年代にかけて整備された多くの建物は老朽化し、建替えも控えている。建物と共に住民の高齢化も著しい。居住年が20年以上の世帯が3分の2で、3人に1人の高齢化率、単身世帯も半数以上と孤立化も進んでいる。また、居住する「住民」も地域外からの転入や外国人の流入など、団地内でのコミュニティの在り方も時代とともに変化している。

そこで、機構は2016年に「くらしのアンケート」を実施し、住民間のつながりの再構築が重要だと分析した。でも、公設公営中心のまちである

がゆえ、地域で活動するNPOが多いわけではない。担い手をどうするか？まずはそこから始まった。

🏠 地域に根づくアナログ活動

担い手の有力候補はすぐ近くにいた。いきがい事業団「かどや」だ。かどやは大阪府の「高齢者就労的生きがいづくり活動支援事業」を活用して、2002年12月に設立された任意団体。地域の60歳以上が中心となつて、会食・配食サービスや総菜販



かどや



田中さん

とはいえ、なぜか楽しそうだった。ブザーの音が杞憂に終わると、みんなではっとする。そんな騒ぎが自然な顔なじみやつながりのきっかけになっている実感があるからなのだろう。あんしんドアセンサーを設置してから、見守り券を利用してかどやに来てくれる人は増えたそう。設置の問い合わせも少しずつ増え、65歳以上の単身高齢者を対象にしていたが、障がい者や高齢者夫婦世帯へと対象を広げ、現在は47軒が登録している。

今回の取材でわかったように、公営住宅のコミュニティの変化は全国各地で起こっているはずで、私たちの活動する大阪市西成区もそのひとつ。孤立死の問題も現在進行形だ。劇的にデジタル化が進んでいる現代の日本社会にあっても、アナログな取り組みが有効な場面は少なからずある。荒本の「あんしんドアセンサー」の取り組みがそう。どんな方法であれ、肝心なのは、地域のソーシャルリーダーが地域の特性やニーズを把握し、住民に向けて「なんとかしたい」という姿勢とメッセージを送り続けることだと教わった気がした。公営住宅の市民営化の議論は今後も続くだろう。どこに正解があるかはわからない。しかし、公営の住宅制度が時代に合ってきていないのは事実だ。時間をかけてでも解決策を探っていきたい。

文責：西田吉志・田岡秀朋

るやん」という声や課題もあったが、シンプルさも手伝って何人かがお試して設置してくれた。いざ始めてみると思った以上に誤作動が続出した。長期間留守にしていただけだったり、風邪で外出を控えていただけだったり、ガラスを割っ

て家に入ると住民さんが寝ていたり、近所の住民さんからうるさいと苦情が来たり……。現場を取り仕切る理事の田中さんは、「上は決めるだけでええけど、現場は大変や。なにが安心や。災いのモトや」と笑いながら話してくれた。

.....



かわらぬおふくろの味

体的に何をするのか？」となると足踏みした。議論に議論を重ねながらも、机上ではなく現場で実践しながらヒントを探っていくうちに、毎月1回見守り券を発行してみることにした。「月に1度、お昼ご飯をかどやに食べにおいで」と住民にメッセージを送り続けた。徐々に徐々に人が来るようになり、顔なじみが増え、住民同士がつながるツールの一つになった。と同時に、互助の取組みも考えた。最優先したのは孤立死の問題だ。月に一度の来店だけではなく、日常的な安否確認の取り組みが必要とされていた。効率や便利さで言えば、タブレットやスマホのアプリの活用もあるかもしれないが、高齢化が進む荒本では「玉の持ち腐れ」になりかねないし、自動応答の電話サービスなどいろいろ検討したが、最終的にはアナログな「あんしんドアセンサー」の導入が

🏠 災いのモトがきっかけに

決まった。

あんしんドアセンサーの仕組みは極めてシンプル。玄関ドアにセンサーを付けるだけで、48時間ドアの開閉がなければ、大きなブザー音が鳴り響く。それを聞いた近隣の住民さんにブザーを止めてもらい、コールセンターが連絡をうけ、安否を確認する。これだと万が一、家で倒れていた場合でも48時間以内には発見される。住民説明会では「死んでから見つかってもしゃあない」「48時間って長すぎる」「ひとり暮らし高齢者やってばれ

売、地域美化活動など、「いきがい」を大切に住民同士で協力しながら活動を続けていた。やがて、機構の協力も得て2015年6月にNPO法人となり、高齢者だけでなく子どもや若者、女性や障がい者など、支援が必要な人びとが活躍できる場をつくっていくことになった。かどやと機構がタッグを組んで地域住民（公営住宅住民）のつながりや互助づくりを進めていくとしたが、しかし「いざ具



あんしんドアセンサー

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

ひと口の心遣いが 嬉しい Main house

鶴見橋商店街にある「喫茶 Main house」は、このあたりでは珍しいログハウス風の外観。それに合わせて内観もすべて木造で、4人がけのテーブルが9席、カウンターが4席と広くゆったりとしている。

このお店には何度か来たことがあり、オシャレなヒゲのマスターが取材を快諾してくれた。「Main house」は創業36年とかなり歴史がある。マスターはかなり若く見えるが何歳の頃から経営しているのだろう。

取材に行ったこの日は午前中だったのでモーニングを注文。チーズトーストやサンドなどを選ぶ4種類のセットから普通のトーストのセットを注文。トーストにゆで卵は定番だが、フォークの上に乗った一口スパゲッティが珍しかった。コーヒートの良い香りが食欲をそそる。



モーニングを食べて出ようかと思っただが、以前に飲んだミックスジュースのおいしさを思い出し、我慢できずに注文。優しい甘みがあり、わずかに残る果物の食感がとてもおいしいので、ぜひ注文してみたい。

「Main house」はランチメニューも豊富なので、昼食にもぴったり。以前は夜にお酒も提供していたが、今はやっていないそう。残念…。

居心地がよく、コーヒーと料理もおいしい「Main house」。常連になってしまいました。

COFFEE [Main house]

住所…大阪市西成区鶴見橋3丁目1の13
電話…06-6568-6371
営業時間…7時～19時（日曜日は12時迄）
定休日…月曜日

新田に勧請された、 五祭神を祀る津守神社

今回は、南海汐見橋線の津守駅から南へ約450m、西成公園や津守下水処理場を越えたあたりの新なにわ筋沿いに鎮座している津守神社。入り口には「村社津守神社」と記された社号標と明神鳥居が立ち、境内へとなる。境内中央奥には千鳥破風唐破風付きの豪華な拝殿、幣殿、妻入りの本殿が建立されている。拝殿前にはブロンズの狛犬が、境内社には安永8（1779）年生まれのどつしりとした石造狛犬が見られる。



このあたり津守一帯は江戸時代に「津守新田」として開墾された。「津守神社」はその新田開発の際に勧請・創建されたらしいが、年代は定かでない。一説によると、元禄11（1698）年に京都の横井源左衛門、金屋源兵衛が津守新田の開発にあたり、工事の成就とこの地の五穀豊穡を祈願し創祀されたということだ。

名称は二転三転した。江戸時代には「五所神社」「五社大明神」などと呼

ばれたそうだが、元禄15（1702）年4月の社地免租の古文書には「稻荷神社」と記録されている。明和6（1769）年、白山善五郎氏より寄進された現在の場所に社殿が建立され、明治4（1871）年に「津守神社」に改称された。神社には「白山善五郎に碑 白山家」という碑が建てられている。

津守神社の境内社と御祭神も紹介しておこう。境内社には「祖霊社」「秋葉社・金比羅社」「白龍社」「稻荷社」「産土社」がある。本社の5つの御祭神は、①日本民族の祖神である天照皇大神、②衣食のことを掌り生業の繁栄を守る稲荷大神、③田畠を分掌し穀物を成さしめる大歳大神、④海路を司り航海を護る住吉大神、⑤海洋を主宰し海産の幸を授ける綿津見大神である。

この記事を書く機にぜひ津守神社に足を運んでいただきたい。また違った風情が体感できるはず。驚きと感心に満ちた神社だと思う。

文責…山村裕太・寺島史視



【田岡秀朋】天威無双、震傷膨大、泡年万削、富士騒然、異族統合。平成創作四字熟語のTOP5。どれも大きな出来事。令和が「令和」にならない時代にしたい。



【佐々木敏明】凍てる月猫背の肩が家路急く美ら海に万葉騙る花盗人水雨止み轍おちこち七つ八つ



【沖田一志】今までタブレットPCを持ち歩いてました。タッチパネルが不便なのでPCを開く度にマウス、キーボードを並べて使っていました。最近、ノートPCに買換。この煩わしさから解放されました。



佐藤 千弘(さとう ちひろ)さん

「ゆ〜とあい」で開催する地域イベントのお手伝いに来てくれる佐藤さん、行事やイベントが好きな3歳と1歳のお母さんです。今は、毎日内容が変わる子どもたちの「おままごと」を観察しているのが一番の楽しみ。他にも季節行事、運動会、発表会など保育所のイベントを通じて子どもの成長を間近で見られるのがいいそうです。

ゆ〜とあいで開催する子どもイベントにも積極的に参加し、「ゆ〜とあいってどんな施設なのかも知っていきたい」とありがたいお言葉。今回も「子どもといっしょにいつもニコニコ」なおとなりさんをご紹介します。

些事争論

『宇土半島私記』

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成にたどり着いていた、或るオタクのゆったり系コラム。

ごく稀にだが、「歌」の聞こえる本に出会うことがある。歌とは文字通りの歌唱の意ではなく、風の音や静寂の中で微かに響くような、遠い昔に生きた誰かの、声にならない声のことである。この『宇土半島私記』も、正しくそのような「歌」の聞こえる一冊だった。

宇土半島は熊本県の中央部から西の島原、天草方面に向かって細長く突き出した半島で、北は有明海、南は不知火海にそれぞれ面している。著者は熊本市の生まれ。最晩年を迎えた祖母が、祖父と死に別れた後、故郷への帰還を熱望したことで、一家を挙げて宇土の町に転居した。著者はこの時4歳、祖母にとっては、熊本に嫁いでおよそ四十年目の帰郷であった。本書ではその祖母をはじめ、家族、血族を巡る思い出が、半島の歴史や伝承、伝説と絡めて語られる。病を得て年老いていく自らの姿も丹念に文字に刻む。無論、一族の系譜に連なる者、土地の系譜に連なる者としてである。「西北側を有明海に向かって大きく開いた半島では、盆地気象の熊本とは空気の匂いが全く違っていた」と書中にあるが、物語の中にはその潮を含んだ空気の匂い、風の匂いが一貫して流れる。

宇土半島私記

久野啓介



「死者の海」と題された章に、とりわけ心を引かれた。ここでは寛政の大津波に話が及んでいる。寛政四（一七九二）年に島原の雲仙岳が大噴火を起こし、その後の地震で山体が崩壊。崩れ落ちた大量の土砂は有明海に突入し、平潮より二十メートルも高い大津波が宇土方面に押し寄せた。旧肥後領内の死者は約五千人、その内宇土郡が千二百人。肥前島原領内の流死人およそ一万人と合わせ、「有明の海は、一夜にして、一万四千五百余の死者で埋め尽くされた」という。そこまで読み進めた時、風景が隠し持っている無数の死が確かな感觸を伴って立ち上がり、土地の声を聴くとは、死者の声を聴く行為に他ならないのだということに気付く。

さが胸に戻ってくる。上海に出征し、復員後は家族のために働き詰めに働いた父。四十代前半の若さで亡くなった母。その理由は書かれていない。娘の頃に宇土小町と呼ばれた祖母は、帰郷の願いを果たした三ヶ月後にこの世を去った。それぞれの人生に向けられるのは、歳月を重ねることしか得られなかったであろう、労りの感情だ。人は生まれ落ちた土地の記憶を生き、その生きられた生もまた、時を経て土地の記憶そのものとなっていく。そこには、言葉にも出されず、文字に書かれることもなかった喜びや悲しみがある。歴史とは何よりもまず、無名のうちに生きた人々の、そうした無数の希望や失意の集積なのだろう。物語の端々に立ち現れる海の照り返しや、南の眩しい光の中に、そのような人の営みの変わらぬ姿を感じ取ることができた。

忘れるところだったが、本書は二〇一五年、熊本日日新聞社主催の第五六回熊日文学賞を受賞している。

ハンブレイ・T

久野啓介『宇土半島私記』石風社、2014年

6月 2週

ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

こうほう

まちを歩くと台風被害でなくなった建物の裏側にあった路地が、春に芽吹いたように通りから顔をのぞかせている。幸が不幸か、最近では空き地になったかと思うと直ぐに新築の工事が始まる。

現場の前を通る度にその進捗の速さに驚く。木造や鉄骨の建物はまず骨組みを組み立てるので、比較的早く全体像が見えてくる。また、木造の「壁」を組み立てる2×4工法（ツーバイフォー）…2×4インチの部材を組合せる）は効率がよく工期が短い。戦後アメリカの住宅・建設労働者不足を補ったこの工法は、日本では1974年に正式に認可され、高度経済成長期の住宅需要に応えた。これが町で見かける「いつのまに」の理由の一つである。

その一方で、柱・梁・筋交いなどの「軸組み」で支える在来工法の技術継承は以前から問題になっている。数百年の風雪に耐えてきた木造建築を支えるこの工法は、修復という柔軟性を持ち合わせている。建物の築年数は堅牢性よりも繰り返された修復の結果なのだ。

積年の症状に臨機応変に応じる経験と技術が大事。と、それへの愛ですかね。（安田拓也）



新築3階建ての木造建物の骨組み

【谷口円】スニーカーを買いました。黒・グレー・オレンジの配色で、グレーの部分が反射板になっています。光が当たると光るので、街を歩いていると「まぶしいと思われてないかな…」と心配になります。



【寺島史視】15月5日は子どもの日。でも、鯉のぼりの記憶はない。家に帰ってどうしていたのか聞いてみよう。ところで「せいくらべ」っていう歌を今まで知らなかったのは自分だけかな？今どきの子は知らないだろう。



【西田吉志】14月の大阪決戦を受けて思うこと。毎回、対維新になると自然と改革反対派になってしまう。いわゆる都構想に惑わされてしまう。自分たちが選挙で何を問うべきなのか、改めて考えさせられた。



【安田拓也】アパート前にいる2匹の猫に2匹の赤ちゃんが生まれた。かなり小さくて可愛い。1匹が間もなく息を引取った。コンクリートジャングルは厳しいけど強く生きてくれクロ。



葉っぱの吐き

といき

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。



「シャコサボテン」の巻

お元気ですか？
先輩が退職されてもう3年ほどになりますね。
覚えてますか？
先輩が事務所でお世話をしていた「シャコサボテンの花」。
水やりから日光の調整など忘れること無く、育ててましたよね。
私はそばでいつも見てました。

「このサボテンは一緒に働いて居た方が大事に育てていたの。その後退職され、私がお世話を引き継ぎました。」と、話していたことを思い出しました。

そのサボテン、私がしっかり引き継ぎ、今は私の家で元気に成長しています。

プクプクした透明感ある緑の葉っぱが目眩しいです。冬に蕾をつけ、春前には可愛いピンクの花を咲かせます。花が咲いたらまた写真送ります。

そしてこれからも大事に大事に育てます。

赤井まゆみ

シャコサボテンのこと

サボテン科の植物で沢山の種類がある。甲殻類のシャコに似ているのでシャコサボテンと名付いたという説もある。花言葉は「冒険」「波瀾万丈」。

い湯かげん

おおさか改革は次のステージへ

前代未聞のダブルクロス選挙は維新の圧勝に終わった。能天気なボクは、大阪府議会が総合評価入札を制度化した障害者雇用条例（ハートフル条例）改正案（ボクはユニバーサル就労条例と呼称してきた）を可決してくれたことを喜んでた。また、松井知事が改正人権条例へ踏み込んでくれたことも評価していた。打ち明けた話、これという失点もないし、松井知事は再選されると思っていたが、突然の辞任となった。

始まってみると、選挙戦での維新の主張は分かりやすかった。①府と大阪市は二重行政になりがちだから1つにした方が良く、②市民サービスは住民に身近な区に任せる、③民間企業にできることは委託した方が

効率的、④保育教育無償化や地下鉄民営化、区役所への権限委譲など改革は進行中、⑤民意は多様だから最後は選挙や住民投票で決める、⑥バラバラの選挙は非効率だから「4重選挙」にした。

それ自体は間違っていないかったし誇張でもなかった。ところが、①1つにするあまり政令都市の力が弱くなってしまう、②分権には市民参加が不可欠、③ちゃんとした民間に委託するためのルールが必要、④教員不足など改革には修正も必要、⑤選挙や住民投票は万能ではなく少数意見も尊重する、⑥回り道でもルールは守るべき、という当然の疑問に答えようとすると、話は少しめんどろになる。

柳本候補はその「めんどろさ」を引き受けようとした。社会問題が輻輳する西成の出身らしいと肌で感じた。しかし、柳本候補を応援する政党陣は「めんどろさ」を逃げた。「維新は性悪、都構想は廃案しかない、維新を潰すチャンスだ」と逆の意味のシンブルさでちやぶ台を返したから、鼻の引き倒しだった。

奇しくも、ボクは前号の「いい湯かげん」で、「ボクに任せて」という橋下さんに共鳴する知人女性に、「市民参加は（そんな）めんどろさ」と問答したと書いた。維新側も反維新側もめんどろさから逃げた空中戦は、あるうことか改革 vs 反改革に曲解され、当然のように改革側の圧勝となった。柳本候補は言いたいことの半分も言えないまま敗者となった。

最初から劣勢の選挙となったので、ボクは「都構想の対案は柳本」と発信し、選挙の目標を「市会に市民会派を」と定めた。柳本さんが「維新もまた民意」（公募校長は見直す）と都市構想や教育政策をちゃんと議論しようと語りかけたのは良かった。軒並み応援する候補が落選するな

今回の統一地方選挙の前半戦の結果にはいろいろと思うところがある。隣保館を運営する立場から高齢化や貧困問題、子どもの教育（学力）など生活の問題について、いかに幸せに暮らせるのか、どのような支援体制を築けばいいのかと日々考える身にとって「大阪都構想」なるものは、結局のところ、絶大な権力が大阪府知事に集中するばかりではないかと危惧する。

また、現在の構想では大阪府が「大阪都」になることはない。「特別区設置に関わる法律」により大阪市を無くして4つの特別区を設置するにすぎない。こう考えざるをえないのは「法定協議会」の議論があまりにも中身がないからで、これで大阪市民が幸せになれるとは到底思えない。

しかし、民意は大阪維新の会の「都構想」を支持した。今後は特別区のあり方を注視し進むべき方向を見据えて、少数ではあるが弱い者の意見を政治に反映できるようにしたい。

（寺本良弘）

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。



【若松司】詳しい人によると大阪都構想って中身はまだ決まっていらない。だったら政令市を残したままの都構想というのもありかもしれない。「換骨奪胎は得意」って人は多そうだし。



【山村裕太】自分が30歳になる年は、平成30年と覚えやすかったのですが、令和になると数え方がややこしくなりそうです。「令和生まれ若いな」って言うオッサンになった自分が想像できます。

かで、武さん（生野区）と松崎さん（住之江区）の無所属候補が接戦を勝ち抜いたのは朗報だった。無所属議員が「めんどろさ」を引き受ける架け橋になるかもしれない。在野とはいえない、総合区を提案している公明党には先見がある、ボクはそう期待する。松井新市長も、分権のための合区とか、万博と重なる出費、ましてや実際に大阪市をなくすのがどんなに「めんどろさ」か覚悟しておられると察する。これだけの時間、経費、敵味方に分かれた論戦が無駄にならないことを祈る。「大阪市を残した都構想」「市民が参加する改革」、そこに人権や福祉が輝く、そんなおおさか改革の次のステージを期待したいものだ。

地域の縁を心でつなぐ

松崎 心 心の時間

数年前にご主人を見送った
ご婦人が「私は主人の生前中、
好き放題してきました。今に
なって、主人がいてくれたか
らこそ家族が幸せだったこ
とに気づき、主人には申し訳
なかったと感じます。私が悪
かった」と詫言っているのです。
横で聞いていた娘さんも「お
母さんは一生懸命に家のこと
をしてくれ、お父さんも喜ん
でいました。私こそ、もっとお父さん孝行すれば
良かった。私が悪かった」と詫言っています。お互い
に自分が悪かったと詫言る親子の姿は、本当に美
しいものでした。

『歎異抄』の一節「善人なほもって往生をとぐ、
いはんや悪人をや」「悪人こそが救われる」と
いう意味です。この親子のように自分を「悪い人」
と見なす姿勢に救いが生まれ、未来が開けてくる
のです。逆にお互いが「自分は正しい。自分は良い
人」と主張すると争いごとが生じます。外ばかり
に眼を向けていると、自分の都合で「良い人／悪
い人」と決めてしまいます。

自分の内に眼を向けて「悪い私」に出会うこと
も大切なことです。

松向寺 通法

選挙で「つながりづくり・ひとづくり」

4月の統一地方選挙では、西成区から立候補した立憲民主党の小林
みちひろさんの当選に向けて取り組んだが惨敗した。前回の民主党へ
の逆風よりも、今回は風当たりがよかったと感じただけに、前回
よりも票を減らしたことは更に残念だった。

ただ、選挙は単なる勝ち負けだけではなく、大切なことを教えてく
れる。印象的だったのは、終盤に人がいなくて本当にどうしようか困
っている時に手伝ってくれたのは、昔一緒に働いていた同僚や地域で働
いていた方々、そして地域で共に取り組みを行っている仲間であった
こと。困っていることを察知してくれて、文句の一つも言わず黙々と
取り組んでいただいたことは本当に感謝の言葉しかない。

また、毎日朝早くから、夜遅くまで、時には4・5時間も自転車や練
り歩きをしてくれた若者たちにも感謝している。様々な困難を共に乗
り越えてきた経験は、これから地域で行う取り組みにきっと活かして
いけると感じた。

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感
じたことをつぶやいて、西成の
まちづくりに役立てていきます！



ナビ編集長 寺嶋公典

smile
ゆーとあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆーとあい」は、地域コミュニ
ティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設
です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩
み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

ナビ5月号(vol.147)

発行日：2019年5月1日(創刊日：2007年1月1日)

発行：株式会社ナイス

住所：大阪市西成区長橋 3-6-33

電話：06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp

url: http://www.nice.ne.jp/

編集長：寺嶋公典

編集：沖田一志、佐々木敏明、岡田秀朋、

寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太、

若松司(あいうえお順)

イラスト：hidarimaki デザイン：谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

